弘前城石垣修理

第 13 回～本丸東面石垣の解体工事～

平成 29 年４月９日に着手した弘前城本丸東面石垣の解体工事は、平成 30 年 10 月 26 日に最後の一石を取り外し、終了しました。最終的な解体石材数は、2,172 石です。

工事着手前、解体修理の予定範囲内には 2,518 石の石材がありました。最終的な解体石材数が少なくなったのは、東面石垣の北側で築城の頃のものと思われる出角（石垣の角部）が確認され、それを残すこととしたほか、石垣の膨らみや石材の傷みが少ないと判断された箇所については、解体せずに残すことにしたためです。弘前城跡は国の史跡に指定されており、本丸に築かれた石垣は、最も古い箇所で約 400 年前にまでさかのぼるものです。現地に残っている石垣は、先人によりつくられた貴重な文化財であるため、当市では、できるだけ当時のものを残しながら修理する方法を模索しています。

石垣の解体中には、石垣の裏側から新たな発見もありました。特に、江戸時代の元禄年間（約 300 年前）に築かれた井戸や排水の跡は、発掘調査の大きな成果の一つです。

井戸跡は直径約６ｍの円形をしており、東側に長さ約５ｍ（７～８石）、高さ約６ｍ（11 石）にわたる石積みを伴っていました。元禄以前の絵図でもこの地点に井戸が描かれているのに加え、出土した遺物の状況から、元禄以前につくられた井戸が、元禄の石垣築き足し時に嵩上げされたものと考えられます。井戸枠は、東側の石積み 11 石目付近の深さで、遺構中央部に二重になって発見されました。木枠は正方形で、外側が一辺 1.7 ｍほど、内側が一辺 1.2 ｍほどです。外側の木枠と内側の木枠の間には砂が詰められており、井戸水をろ過する働きがあったと考えられます。実際の水のくみ上げは、内側の木枠で行われていたのでしょう。

排水跡は、石垣の中段に設けられた蛇口から、本丸での生活排水等を内濠へ流した施設です。

蛇口の背面には、井戸に通じる暗渠（水路）がつくられていました。暗渠のうち下部は元禄の構造が残り、上部は 19 世紀（江戸時代後期）以降につくり直されていたことが確認されましたが、下部はスロープ状、上部は階段状となっており、石組の構造にも時期の違いが明快に現れていました。

また、東面の北側では、西側（本丸側）へ延びる石垣の出角も見つかりました。この石垣は、自然石を積み上げた野面積みという積み方でつくられており、築城期の盛土と元禄の盛土の間に挟まれるようにつくられていました。江戸時代前期に積まれた石垣であることは間違いなく、今後調査成果を整理しながら、具体的な構築時期を絞り込んでいきたいと考えています。

※弘前城本丸石垣修理事業について、詳しくは下記 URL をご覧ください。
http://www.city.hirosaki.aomori.jp/ishigaki/
■問い合わせ先　公園緑地課弘前城整備活用推進室（弘前公園緑の相談所内、☎ 33・8739）